

自然と教育

第18号

2008年9月1日
奈良教育大学
自然環境教育センター



「生活」集中講義のキャンプでの作業風景：地元の方の指導で藁草履作り（山口礼朗氏作）

目次

安藤誠也：中学生の「私」と対話しながら歩いた10年	2
田村芙美子：「ウシガエルの解剖」から一言	5
鳥居春己：レッドデータブック哺乳類大井川源流域調査－1999年	7
平成18・19年度自然環境教育センター事業報告	13
自然環境教育センター協力研究員について	19
編集後記	20

中学生の「私」と対話しながら歩んだ10年

安藤 誠也（奈良大学大学院修了）

「自然と教育」に原稿を依頼されて、さて何を書こうかと迷っていた。何か生き物の話を書こうと考えたが、もっと本音で書けるものを頭の中で探した。そして教育大学の雑誌であるから、学校について書いてみようと思った。とはいっても私は学生で、本音で書けるのは、自らが生徒として受けてきた、教育についてである。教育を受けてきて、今でも心に深く残っているのが、『いじめを受けた』である。今でも、中学生の自分が毎日心の中に現れては「助けて」と言ってくる。私は中学生の自分を消す事ができなかった。「助けて」と言われると、今が見えなくなってしまう。「今」という時間がどれだけ充実したものであっても…。

私は1995年4月から1998年3月まで公立中学校の生徒として過ごした。私が通っていた某公立中学校は、いじめと総称される暴力や違法行為が日常茶飯事に起きる無法地帯であった。廊下や体育館の窓ガラスはいくら張り替えられても、すぐ破壊されて無くなっていた。中学生が改造バイクをグラウンドで乗り回しているのにもかかわらず、教師は注意しなければ、すぐ近くに警察署があるのに通報もしない。授業中に教室の窓ガラスがバットで破壊されて、何度も授業が中断した。壁と言う壁はラクガキだらけ。トイレからはタバコの白煙があがり、職員トイレ以外は中に入ると生きて出てこられるかわからなかった。担任やクラブの顧問がある日、学校に来なくなった…何故かと言うと、生徒(暴徒)にやられて、複雑骨折になったり、精神が破壊されてしまったからだ。これらの記憶は当時この中学校にいた多くの生徒に共通した認識である。

今度は私自身の話になるが、中学校生活3年間の中で、殴る蹴るの暴力を受けなかった日数のほうが少なかった。廊下を歩いているだけで「調子にのっているじゃねえ」と言われ、トイレに閉じ込められて数人からリンチされた。いきなりナイフで掌を刺された。下校中に4人からリンチされ頭を靴で踏みつけられた。授業中、テストの返却があって教卓

まで取りに行っている間に、椅子が持ち去られていて、気付かずに座り尻もちをつき尾椎を脱臼した。

このようないじめに対する教師・学校側の姿勢にとっても不満をもっている。いじめがあったことを全体の問題として扱わず、教師がいじめの現場を目撃した場合のみ、当事者を突き合わせて機械的な問題処理をする。教師が見ていないところでまた何をされるかわからないので、被害者は言いたいことも言えない。もちろん事後の心のケアなんて全くなかった。

私の知っているだけでも何人もの生徒が不登校になったり、転校して行った。私自身も毎日、学校に行くのが億劫になっていた。朝は起きられず、遅刻ぎりぎり登校していた。けれども一日も休まずに行った。なぜなら私には夢があったからだ。その夢は大学に行かないと叶わない夢だったから、負けるわけにはいかなかった。

誰にも助けも求めることが出来なかった。自分だけが我慢すればそれでいいと思って心に蓋をしていた。そしてそのまま中学校を卒業し高校に入学した。だけれど、自分を騙すことは出来なかった。次第に数々の異常行動として表に現れてきた。暴力を振るってくる連中が自分の家を破壊しに来るのではないかと、夜になるたびに家の周りをグルグルと巡回した。言いたいことを言えない環境だったので、口を開けて考え事をしていると、心の中で思っていることを無意識に言葉として喋ってしまい、何かをされないかという恐怖感から、常に口をびたっと閉じていた。教科書や書籍を読むたびに、バットで窓ガラスが破壊され、命の危険を感じた授業の光景を思い出して、激しい胸の痛みや冷汗に苦しんだ。

「助けてください」という言葉を中学生だった頃、何度も言いたかったが言えなかった。高校生だった時、何度も高校のカウンセリングルームに足を運ぼうとしたが、人の目が気になって行けずじまいに終わった。大学生になって、まともな人間を装って生きているのが限界になったとき、臨床心理士のカウンセラーにカウンセリングを受けることにした。

最初の数ヶ月は素直に自分の思いを話すことが出来ずに世間話で終わった。その後の4年間は、いじめられた時の光景、怒り、嘆き、などを延々と話した。なぜ、あんな中学校にいなければいけなかったのか、自分や他人を責め続けた。

私は臨床心理士に相談していることにとても期待をよせていた。そのうちに魔法の様な技を使って、ストレスを完全に引き取ってくれるのではないかと期待である。でも、そんな魔法は存在しないことが分かった。臨床心理士によるカウンセリングは、これまで抑圧して話すことの出来なかった問題を、言葉に出して表面化させ、自分なりの回答を出すためのトレーニングであった。カウンセリング開始から3年以上たって私が出した回答は、「いじめの加害者に直接謝罪を求める」であった。しかし加害者に謝罪を求めるといっても、心の中には当時受けた暴力による恐怖心があり、加害者と会って話しをすることをためらい続けていた。

そんな矢先、中学校卒業10周年を機に同窓会を開催すると案内状が届いた。同窓会の実行委員の中に、靴で私の頭を踏みにじった相手の名前があったので、すぐに破り捨ててしまった。しかし、この同窓会を逃しては、会うことが難しい者もいるのではないかと思ひ、参加したほうがいいかもしれないとの気持ちが強くなってきた。臨床心理士に相談すると「私はそれを止めることは出来ません」と言われ、それに加えて同窓生数人から出席を求められたこともあって、出席することにした。

同窓会は隣の大きなホールを借りて行われ、200人以上いた同窓生の30人ほどが出席したが、教師の出席は一人もなかった。出席者の中には当時、不良グループを形成していた者たちが大勢いた。私は同窓会の前に、司会役に対して挨拶がすんだらマイクを貸すように頼んだ。マイクを渡されると私は壇上に上がり、「このなかに、いじめや授業妨害をした覚えのある人は、同窓会を楽しむ前に反省しろ。私は10年たった今でも、当時受けたいじめで苦しんでいる。」と言った。ざわめいていた会場内は静まりかえった。そのあと、現在の自分の状態や、この5年間、カウンセリングを受けてきたことを話した。話しが終わると会場内からは多くの拍手が聞こえてきたが、馬鹿にした様子ではなかった。そのあと、会場で加害者個人と話し合った。昔と変わらな

い酷い人間もいたが、反省し謝罪してくる者が多くいた。

同窓会に出席して発言できたことが自信になり、その後は同窓会で会えなかった加害者との対話を進めることとなった。そのなかでも解決したかったのは、先に述べたトイレに閉じ込められて数人にリンチをされたことであった。それは1996年1月のことで、もう12年も前のことだが、決して忘れることのできない記憶となっていた。

2008年1月の夜、私は連絡がついた加害者Aを中学校前に呼び出し、リンチをされたトイレが見える場所に立った。加害者Aは私が電話で「12年間お前のことを何度も殺してやろうと考えていた。」と言ったことに、恐怖を感じて会いに来たらしい。加害者Aは自分が軽い気持ちでやったことが、12年もの間、他人を苦しめたことを反省することとなった。加害者Aは私に一度謝罪をしている。しかし、その謝罪はリンチの現場をたまたま教師に見つかり、謝る気はなかったが形だけ謝ったことを認めた。私は加害者Aに激しい怒りを言葉としてぶつけた。加害者Aは、自分が12年前にリンチをしたトイレの前で、地面に頭をつけ謝罪をした。それを見ていい気分にはなれなかった。だけれど心の中にいる中学生を救うことは出来た。

もちろん加害者との対話が上手く行くことばかりではない。自分がやったことを棚にあげ、悪態をついて逃げていく者もいて、私にとって好ましくない結果に終わることもあった。だけれど、その当時、言いたくても言えなかった事を言えるようになったことが私の自信になっている。全てが解決したわけではないが、心を安定させることは出来た。ここまで私はいじめの被害者として書いてきたが、一方でそのストレスを他人にぶつけて迷惑をかけてきた。私はその人たちに謝らなければならない。

この原稿を書いているのは、今の自分が過去に戻れるのなら、助けに行きたいということである。でも、そんなことは出来ない。子どもにとっては、学校が世界そのもののように見えている。だからどれだけ辛くても無理をして通おうとする。近頃、いじめのことをマスメディアで頻りに報じているが、それらの多くは被害者が自ら命を絶った後に、原因は何だったのか取材をしたものである。なぜ気づいてあげられなかったのか…と大人たちは後になって

言うが、子どもは言葉に出せなくてもサインは出していたはずである。子ども1人1人の声を聞き、個性を伸ばすためには、教育現場や教師に人的・時間的余裕がもっと必要というのが、元中学生としての意見である。

学生時代、自然環境教育センターの前田先生、鳥居先生、ゼミ生の皆様にはとてもお世話になりました。この場をおかりしてお礼を申し上げます。



イノシシ：輸入筍の増加や竹材の利用減によって放置された竹林を、エサ場や通り道として使うイノシシ。写真の竹林ではタケノコの食痕が多数みられた。



ノウサギ：自動撮影装置を林の中に1年間設置したなかのベストショット。ウサギは1羽、2羽などと数えられるが、確かに跳んでいる。

「ウシガエルの解剖」からひとこと

田村芙美子（奈良教育大学自然環境教育センター）
（奈良女子大学共生科学研究センター）

「絶対いややせ！」

「やってみたい！」

「生き物をそこまで虐待してどうするのですか。ビデオや写真でいいじゃないですか。」

「気持ちワルー…。カエル大嫌い!!」

「私、欠席です。」

『カエルの解剖をやります。』と、私が担当していた高校3学年の生物の授業も後半に近づいたとき、生徒に授業の予定を説明するや否やこのような叫びが高々と生徒から出てきた。そこで、わたしは生徒達にこの実験の目的について2点の重要性をゆっくり説明した。1点は生き物を観る場合に如何に実体験が大切か。2点目は卒業後、自分自身の生活環境と「ヒトの体の構造のしくみ」を理解している事が如何に大事なことか。

まずは、生徒達にこれまでの小学校、中学校で理科の時間・クラブ活動などで「(動物の体のつくり)を目的とし、動物を解剖した経験があるか」聞いてみる。カエルの解剖の実験について説明するときいつも生徒自身の現状をお互い認識しあう。

結果から年々、「(動物の体のつくり)解剖」について生徒の体験の少なさを感じる。「植物の体のつくり」についてはおおむね実体験が出来ているように思える。通常、小学生で魚類、中学生でカエル類などの解剖を通じてしっかり五感?で観察し、子供たち・生徒達は成長段階に応じて複雑な「動物の体のつくり」を体表面、内蔵構造は勿論のこと自然界の中で実験材料である動物の生息場所、食物連鎖などの関わりを理解認識していく。

大半の生徒達は高校を卒業した後、自分の進路、生き方の多様性によって自然界に生息する生物に注目することは少なくなる。しかし、わたしは実際の動物の解剖の体験を通じて、われわれ人の体の内部がいかに複雑にうまく出来て機能しているか少しでも知って欲しいと考えている。

現在、高齢社会となっている。我々は、この世に生を得て豊かに過ごし、出来る限り健康で長生きし、

静かに生を終えたいものである。このような時勢で、自分自身あるいは自分の周囲の人が医療技術のお世話になることが多いと思う。人の体の内部の臓器など、いろいろと関連してくる。また、臓器移植医療、クローン人間あるいは再生医療など、最近の医療技術の進歩で人を中心とした医療と倫理の相互問題が浮上している。将来わたしたちは、知ると知らざるに関わらず人の体についての関わりを持つ。人の内臓の名称がたくさん浮上する。また、それら臓器の繋がりが論じられる。そのとき、実物を知っていることが大変重要となってくる。しかし、人の実物体に出会うことはほとんどない。そこで、私は人の実物体に近く比較的手に入りやすいもの、実物体験ができる実験材料が、ウシガエルだと考える。ウシガエルは通称食用カエルと言われている。ウシガエルは高等動物としてヒトに近いそのバランスのとれたみごとな内部構造を持っている。アニメや図でその内部構造を知ることにはできる。しかし、私は実物に触れる・観る体験は非常に大切だと考える。ウシガエルがこのような素晴らしい内部構造をもちつつ、しっかり生きていることを自分の目で確認し、感動する。子供たち、生徒達に命の大切さも知ってもらえる。

ウシガエルの解剖実験中の生徒たちの様子の一部を披露する。

1クラスの生徒数にも依るが大体1クラス成熟した2個体のウシガエルを用意する。前もってエーテルで麻酔したウシガエルが教室に運ばれると「ウアー!!」叫びを挙げる生徒ともいる、どれどれと解剖皿の周囲に集まってくる生徒もいる。用意した資料プリントを配布し、実験観察の概略を説明する。大きな実験テーブルに輪を作って生徒を集合させ、一方は私が、もう一方は実習助手または生徒の有志で観察、解剖が始まる。途中に麻酔が軽くて動き始めでもすると「ウアー!!」、またもや叫び声が聞かれる。表皮を切り、腹部の筋肉切断するにつれて生徒達の目はカエルに釘付けとなる。心臓が元気に動いていることが観られてから質問も多々でてくる。「カエ

ルは死んでいるのですか?」「案外、血は少ないな。」
「これは何ですか?」目の水晶体を取り出し、レンズの屈折した学校の中庭の倒立した樹木を見て、「わあー反対や、きれいなレンズや!!」と叫び声が聞かれる。授業時間の1時間あるいは2時間はすぐ過ぎてしまう。オスとメスが1体ずつあれば幸いである。

ウシガエルの解剖実験後の生徒達の感想を一部紹介する。

1. 私の大大大嫌いなカエル。でも、こんな大きなカエルを見るのが初めてだったので、カエルに見えなかった。カエルに愛着心がわいてきた。体のしくみを見て、すごく、感動したし、いい経験をしたと思う。この1時間は一生忘れない1時間になっただろう。
2. カエルの体内の臓器を見て、生物が生きているしくみを多く知れてよかった。カエルが犠牲になったけれど、生物が生きているというすばらしさを感じた。
3. 最初はカエルを見るのも嫌いだったけど、いざ解剖となると、結構できた。カエルくんにはかわいそうな事をしたけど、そのぶん、絵で分かりにくい体のしくみを学べた。この実験のことは一生忘れられないと思う。
4. 舌のつくりが人と違っていた。心臓が思ったよりなかなか止まらない。すごい、生命力だと思った。胃の中からザリガニが出てきたのに驚いた。当たり前の事だけどオスとメスでぜんぜん違い、わたしの班はオスだったが精巣は割りと小さい。ふだん図で見るより実際のカエルを見たほうが体のつくりがよく分かった。
5. すごく筋肉がきれいだった。水晶体は硬いと思っていたけど柔らかかった。一番驚いたのはカエルの舌は長いと思っていたけど口の先から出ていたこと。
6. 最初切るのは気がひけたけど、すごく体のしくみがよく分かって、よかった。前から、解剖をやりたいだったので、よかった。本当に勉強になったと思う。
7. カエルを見たときは、気持ち悪かったけど、解剖しているうちに愛着がわいてきました。カエルも人間も同じなんだと思った。水晶体がきれいでした。胃からザリガニがでてきてくさかっ

たです。

8. 筋肉が思ったより少し硬くて、鶏肉みたいだった。膨らんでいるときは大きかった肺がしぼむと小さくなったことにちっとビックリした。生で生きている内蔵や筋肉を見たのは初めてなので、感動した。精巣や卵巣の大きさが想像していたより大きかった。水晶体がすごくキレイだったけど、右目と左目で大きさが違っていたのが不思議だった。今まで写真でしか見たことがなかったので、今日は生で、しかも触ったりできて、良かったと思います。
9. 最初は動くし、気持ち悪かったけど、徐々に慣れてきて、解剖にもちゃんと参加できたし、楽しかった。カエルの目の水晶体がすごくきれいだったので感動した。牛の目の解剖を早くやりたいと思った。もっと大きい水晶体で虚像を見てみたい。
10. 直前まで、もう凄く嫌いで嫌いで仕方がなかったのですが、今は、貴重な体験だったと思います。目の水晶体が綺麗だったのが印象的だったのと、初めて触れた内蔵の感触は、一生忘れられません!
11. 胃の中にボールが入っていた。なんだか人間の影響を受けているのを目の当たりにして「こういうことが全世界に広がっていて、こういうのを積み重ねることで、絶滅していく生き物もあるんやろうなあー」と、思った。

高校教師として在職中はもちろん退職後も常々感じている私のつぶやきである。

最近、奈良教育大学自然環境教育センターでタヌキなどの高等哺乳類の解剖に立会い、改めて私自身が動物の解剖から「動物の体のつくり」を認識する重要性を体験した。



大台ヶ原のナガレヒキガエル

このカエルを解剖したものではありません

レッドデータブック哺乳類大井川源流域調査 —1999年—

鳥居 春己

静岡県版レッドデータブック作成のため、静岡県北部大井川源流部において実施した小哺乳類調査の行動記録を紹介しようと思う。次回の調査の時間配分の参考に時刻も記録している。

7月17日(土)

8時30分：浜松遠州鉄道西ヶ崎駅でTAを捨う。数分待ってもらったらしい。土曜日のためいつもの駅前の渋滞はなかった。浜松インターからの東名高速は込むこともなく、1時間で静岡インターを出る。インターを出る前に日本坂トンネルの複線化が完成していて、左右のルートに分かれていた。インターからはそのまま直進して、安倍川に沿って北上する。

途中天気は良くないが、隣では観光気分で滝の見物。富士見峠近くになるも、富士山は見えず。大日峠には11時前に到着するが、ここからも南アルプスの山々は見えない。目の前にあるはずの大無限山さえも見えないので、そのまま井川ダムへ向かう。ダムサイトを抜け、途中かつて私が住んでいた井川本村あたり(私の職歴は静岡林業事務所井川支所・林道担当がスタートでした)を解説する。ガソリン補給に寄るが、おやじはみあたらない。店では若い衆が集まってジェットスキーの話に花が咲き、店先にはジェットスキーが3台置かれていた。このダム湖では数年前からカヤックが普及していたが、それにジェットスキーが加わったようだ。

11時半：ダム湖北のはずれ、田代の民宿「ふるさと」に到着。延男さんはいつものことだが、どっかへ行ったまま帰ってこないという。おっかさんは元気だが、93歳になりだいぶちぢんでしまったとのこと。天ぷら蕎麦を平らげ12時に店をでる。途中の道でも晴れ間は見えず、見えれば明日は晴れという上河内岳も見えないので、先は暗い。同乗しているのは雨女だろうか。

ほぼ1時間で樫島手前、やはり赤石岳は見えないが、見えるつもりで写真を撮る。すぐに樫島通過。中高年のグループが奥西河内登山路に見える。二軒

小屋直前で三宅さん(今回のレッドデータブックの哺乳類グループの代表)と常葉大のM氏の2台の車とすれ違う。千枚岳の林道キー確保の都合から、三宅さんが入り口まで送ってくるという。13時半二軒小屋に到着し、ほどなくしてテントサイトでOMさんと再会。駐車場でコーヒーをいれると三宅さんも戻ってくる。今回の哺乳類班4人が全員揃った。鳥類や魚類など他のグループも来ているとのことだが、姿は見あたらない。

14時45分：取り敢えずテントサイトに荷物を押し込んで、ネズミトラップを掛けに行くことにする。初心者TAに付き添って神社裏のルートに26台をセットする。「三島の遺伝研から借りた特注トラップは絶対になくさないでくれよ」と三宅さんにきつく言われていたのに、帰り道に設置したトラップの位置と数を間違えているTAに若干の不安を感じる。その後、東電ダムの脇の道に自分のトラップを設置してくるが、恐らく捕獲されるのは大半がヒメネズミだろう。

霞網の用意をしながらレトルトパック中心の夕食には興ざめ。OMさんと協議して次回からは三宅さんを食事担当から外すことに決定する。車で調査に来て、その脇にテントを張れるのだから、もう少し豪華にアウトドアを楽しみたいものである。でも、食後にコウモリ採集があるのだからしょうがないかと納得。

16時48分～17時44分：車矢沢と27年前に担当した旧東俣林道入り口の支線の2ヶ所に霞網を張る。この車屋沢は20年前に前田さん(現在の自然環境教育センター長：彼とのつき合いは長いのです)と二人でコテングコウモリを採集している。ここにTAと監視係りとなるが、鳥類のKTさん達数人が見物にと同行することになった。林道支線はOMさん、三宅さんはテントサイトで釣り竿とフライを使ってのコウモリ釣りに挑戦している。待つことしばし、全くコウモリの声もなければ、姿も見えない。待ちくたびれたKTさん達は帰って行く。支線まで様子を聞きに夜中の散歩。懐電を消した、真っ暗や

みでの林道歩きは久しぶりだ。支線でも全くコウモリの気配がないということなので、20時4分、本日のコウモリ採集は終了とし、帰路につく（テントサイト 20時半）。三宅さんの釣りもあたりはあるものの、合わせが悪くて釣果なしとのこと、当然だろう。

それから、食堂テントで宴会。A氏（今回のRDB調査の事務局）がワインを土産に参加する。相変わらずOMさんは飲めないままで、三宅さんは飲みすぎるままである。当然、TAも飲みは不参加。三宅さんは酔いが回ったのか「鳥居の研究室で飲めないのはけしからん」と訳のわからないことを言っている。ところで、昼間、TAにA氏の名前を聞かれるも即答できなかった。何時間も考えていたのに思い出せない。ところが、テントで飲みはじめると、意識もしないで「おい、Aさん」と呼び掛けたではないか。そのことを当人に伝え、一同で大笑いするものの、ボケが始まったのだろうか。

テントは1~2人用が2張、私の4~5人用と食堂用の大型が1張りなので、しょうがないので年寄りと女性を優先したので三宅さん（私より2歳年長）とTAが個室、私はOMさんと二人になった。明日は5時からネズミの回収をすると三宅さんがいきまいている。年寄りと一緒に調査は朝が早くてかなわん。ましてや三宅さんは野鳥の会の支部長!! 鳥屋は朝が早くてつき会えない。私だけ寝ていよう。

7月18日（日）

6時8分起床。既に三宅さんはネズミの回収を済ませ、OMさんは回収からまだ戻っていないという。しばらくしてTAが回収に向かったので仕方なくでかけることにした。成果はヒメネズミとアカネズミの合計16頭だった（7時6分）。ところが、先に出かけて、回収場所も近いはずの問題児が帰ってこない。待つことしばし、6頭の成果で無事ご帰還。やはりいくつかのトラップがみつからなかったらしい。

今日は東俣林道を遡り、車で行けるところまで行くということに決定。9時8分出発。前を走る三宅さんの運転は慎重で、ジーゼル車でアクセルのふかし過ぎだから臭いので、離れてついて行くことにする。既に亜高山帯なので両側は針葉樹林が続く。クルマユリやサルオガセなども目に付き始めてきた。

9時42分に森尾沢に到着。あたり一帯は作業小屋や重機の収納小屋まであり、かつての繁栄をしのばせる光景だ。私が就職した頃にはこのあたりから広河原にかけては東海パルプの宿舎や多くの作業小屋などがあったのだが、20年以上前の台風の土砂崩れのため、今は林道も崩れたまま。今夜の宿舎（昔の作業小屋）前には3台の先客があった。出口を塞がないよう離れて駐車。

車を止めて、睡眠の三宅さんを残して3人で河原に下りた。河原までの道で他の作業小屋にいる3人の釣り客としばし話をする。二軒小屋に車を置いて、そこからは小さなバイクで入山しているようだ。天井にいるかもしれないコウモリを探しに彼らの小屋に中に入ることを承諾してもらう。小屋の中には食器や机など昔の道具が散乱していたが、寝泊まりしている部屋は整頓されている。その部屋に篠山紀信による幅1mほどの特大ポスター。モデルの顔に見覚えがあるが名前は思い出せないし、かなり古いような気がする。残念ながらコウモリの収穫はなし。

河原へ降りようとしたら、遅くなくても良いので帰りに河原で冷やしているビール持ってきてくれと頼まれる。大井川本流はさすがに川の水は冷たく、ビールは良く冷えている。対岸にサルオガセが沢山見える。

11時30分：車に戻り、昼食。しかし、ここまで来てスパ王とは。昼食後はコーヒーを楽しんでから、昼寝と決め込み、持ってきたマットレスにシュラフを敷いて潜り込む。この昼寝の位置が悪かった。蟻の通り道なのか体中を歩き回られ寝られない。シュラフの中にまで入って来ている。マットを裏返してもすぐに蟻が集まり始めた。そのためキンカンとウナコーワの使用量の多いこと多いこと、塗っては乾かし塗っては乾かしの連続。

14時～：トラップ設定。周辺はヒメネズミのハビタットだらけなので、なるべく違う環境を探すことにした。しかし、駐車場は石が敷き詰められていて巣穴が掘れそうもないが、直径が50cmもありそのような外材が野積みされているので、その間にオコジョやヤマネが入り込んでいるのを期待して(?) 材木の間トラップを突っ込む。OMさんの仕掛けたトラップが近すぎるような気がする。しかし、ファウナ調査なので近くても微環境や地形の違いが反映され、かえっていくつかの種が採集される逆効

果となるかもしれないことも期待した。

昼寝中に先客の車が出ていったので、車を小屋まで進める。小屋に荷物を持ち込む前にコウモリ探しで、ウサギコウモリ1頭が成果。入り口を閉めてから、室内を飛ばせてバットディテクターで遊ぶ三宅さんと覗きこむTA。

16時40分に突然藪の中からバイクが飛び出してくる。魚類の調査グループとのこと、背中には大きなフキを背負っている。しばし雑談。どうやら井川村の住人らしい。

夕食は今日もビールを主食に、レトルトのカレーは半分を朝に残した。19時に霞網セットし、19時38分より霞網の前で待機する。途中、サルオガセを見つける。それを「トロロコブのもと」と言って研究室の皆をだまそうという相談がまとまり採集した。三宅さんは今日も懲りずに駐車場でコウモリ釣りとのことだが、19時53分に霞網にコウモリがかかった。久しぶりに見る霞網にかかったコウモリに感激。しかし、老眼鏡を持ってきていないせいか、なかなか網から外せないで苦勞する。結局は網を切ることで解決したが、種がわからない。コテングとは違うが、ホオヒゲとも違うような気がするが、まあそんなところだろうということで終わりにして、結論は帰って前田さんに任せることで衆議一決。これは後に静岡県初認のカグヤコウモリと判明する。

その後はしばらく何も反応が無い。3ヶ所に張った網の間をぶらぶら往復するも飛んでいる気配がない。そのうちに近くにセットしたトラップにネズミがかかりはじめ、数ヶ所で弾ける音がする。駐車場でコウモリは飛んでいないということで今日は終了ということになったが、21時過ぎにTA担当の網まで戻ってくると、網の目前でユーターンするコウモリを発見する。他の網でも反転するコウモリが目撃され始めたという。そのまま座り込んで自然に調査続行となる。時々反転するコウモリを見ると、大きさから少なくとも2種いることは明らかである。ただ、彼らも網の存在を記憶しているのか確実に反転していて、かかる気配なし。そのうちに網にくっつくように座っている私の前を横切って網から逃げるコウモリまででてくる。今日はあきらめに決定。

小屋に戻り、板の間にマットを敷いて、シュラフを広げ、22時10分に消灯。

7月19日(月)

4時45分、まだ5時前だというのに隣でTAが動きだし、ガサガサ音を立てている。朝早く起きるのがいやだと前の晩に宣言しておいたのに！彼女にしてみれば、おじさん達に囲まれて寝顔を見られるのがいやだということらしい。起こされてしまった、トイレにでも行ってこよう。5時50分頃かなんとか皆動き始めた。

6時15分には三宅さんは回収を終わってしまったようなので、いやいやながら回収に向かう。予定通り、捕獲数は少ない。ただ、予想と違ったのはヤチネズミの幼獣が2頭獲れたことで、それも駐車場の石の多い環境でだ。幼獣は追い出されてそんな環境に出たのだろうか。成獣は周辺では全く捕獲されていないのに(6時42分 終了)。

7時15分：食事をスタートして、7時30分には片付けを始める。今日は千枚岳のお花畑の見学なので、急いで三宅さんとTAがネズミの計測を終える。8時半には森尾沢の小屋を撤収し、二軒小屋へ向かう。途中で保護室長を連れたMSさんと出くわす、というよりは用事があった来たようだ。

東俣林道のゲート到着(9時42分)。9時56分、小石下ゲートを通過し、MSさん三宅さんと別かれる。昨年秋のカモシカ密度調査以来の千枚林道を走る。荒川岳の展望地点にまできたがやはり頂上は見えないものの、小屋ははっきり見えている。次はいつ来るチャンスがあるかわからないTAにとって赤石岳や聖岳の稜線が雲の中なのは残念だ。最も、主力だったMK(始めは彼が着いてくるはずだったが体調不良により欠席)の代理なのだから彼女はここにいることだけでも感謝すべきか(10時18分)。目の前にホシガラスが止っている。ここではI君やMさんら昆虫や軟体類グループが先客だった。しばらく話して最終地点へ向かい、じきに駐車場へ着く(10時34分)。

いつものスパイク地下足袋に足捲えしてゆっくり歩きはじめる。ゆっくり歩いても山小屋までは20分の道のりで、その間に頂上から下山してくる数名のハイカーとすれ違うものの、年配者ばかりだ。最近汗流して山登りをする若者はいないのか、それとも日程が悪いのだろうか。それよりも、車で下山する時に時々登山道を横切るの、彼らと顔を合わせるかもしれないと思うと気が引ける。

10時56分：到着するも綺麗に変貌した千枚小屋に驚く。10分ほど休憩し、千枚岳めざして歩きはじめる。若いはずのTAの息が上がっている。久しぶりの花畑に写真を撮りまくるものの、持ってきたフィルムのストックが心配になる。見る花見る花がまだ撮影していない種だし、以前撮ったスライドもカビが生えたりしているので撮りなおさねばならないからだ。ハイマツが見えはじめ、カバノキは雪圧で極端に曲がっている。じきに森林限界を越えて岩場にたどり着く。久しぶりの森林限界だ。ゆっくり写真を撮りながら歩いてきてちょうど1時間、千枚岳山頂に到着（12時12分）。

取り敢えず登頂記念に山頂の標柱を囲んで3人の写真を撮ってもらう。山頂に後からハイカーが続いて登ってくるので、彼らの記念撮影用にその場を離れる。岩影でコーヒータム、続いて弁当。とは言っても朝の残りのパンとソーセージだけだが、コーヒが旨い。その頃から雨が降りはじめ、一応傘を広げるが、それほど強い降りではないので、OMさんが荒川岳とのお花畑を見物に行った。千枚と荒川の間のカール状の撫窪には広い花畑が広がる。千枚小屋のお花畑は林の中なのでミヤマシウド、バイケイソウ、トリカブトなどが見られるが、ここは強風を避けて地上を這うような種ばかりが目につく。また、岩場と馬の背が続くので、足を滑らせれば数百メートル滑落することとなる。イワヒバリが数羽飛び回っている。大学1年の夏に火打岳でやらされたイワヒバリの調査を思い出した。OMさんは前岳直下までひとつ走りというように登っていった。そろそろ帰らないと約束に遅れるので、OMさん呼び戻す。13時54分、下山。途中、カバノキに登ったり、ぶら下がったりの写真を相互に撮る。

14時24分千枚小屋到着。小屋の回りのハイカーはほとんどが年配者、若い女性は皆無である。最も、昔からアプローチの長い南アルプスの南端にあるここは若い子は少なかったっけ。

トイレ休憩して、すぐに下る（14時30分）。途中、キバシリを20年振りに目撃する。

14時42分、駐車場へ到着。小石下まで時間がないので飛ばして下ることにする。パジェロもこれぞ4WD本来の使い方ですと喜んでいるのではないだろうか。それでも約束より8分遅れて小石下に到着、既に三宅さんは待っていた。二軒小屋へは霞網の設

置地点を探しながら帰路につく。15時46分、二軒小屋帰着。テント張って、すぐにビールとなる。

17時から千石大橋上流の名もない沢と東俣林道支線には再挑戦にと、霞網をセットして戻ってくる（17時56分）。支線の方は二重に張って下に回避しても次の網にかかるという計画だ。今日は獲るぞという意気込みである。すぐに夕食となるが、今日もビール他と肴だけで済ます。19時霞網の監視にかけるが、今日は飲みすぎたのでOMさんに送ってもらい、名無し沢でTAと降ろしてもらおう。三宅さんはあいかかわらずコウモリ釣りにはげむという。今日は全くコウモリの気配がない。途中、OMさんの所まで歩いて様子を聞きに行くも、同じように全く飛ぶ姿を見ることがないという。戻って待機するも全く気配はなし。21時34分にあきらめて帰路につき、21時56分消灯。



荒川岳から連なる山稜

7月20日（火）

今日の作業は三宅さんがセットしたネズミトラップを回収するだけなので、途中の赤石温泉に入って帰るといふことで、朝はのんびりできるはずだった。ところが、朝から雨が振り出す（5時20分）。様子を見ていたが小降りになったところで、テントをたたむべく起床（5時50分）。ところが、「起きまーす」という声だけでTAはいつまでたっても起きてこない。起きるのにいろいろ準備が大変らしい。それでも6時9分には撤収を完了した。

聖岳登山道に仕掛けたネズミトラップを回収に向かう。6時50分から三人で回収、三宅さんの車はピックアップのため私は荷物の見張り番で残る。その間に車の汚れを落とす。7時12分に三人が戻っ

てくる。朝食をとる場所を探して走り出したが、結局は屋根のある赤石温泉入り口のバス停まで進んで朝食（8時12分）。朝食もカップラーメン。雨空にイワツバメが飛び回っているのを眺めていると、ハリオアマツバメとヒメアマツバメも交ざっていた。10時まで待って温泉に入りたいという三宅さんらを残して取り敢えず「ふるさと」まで戻ることにした。

今度は延男さんとも会うことができた。井川のどこかにコウモリのいる洞窟を尋ねるが色よい回答はなし。今日の帰りは山伏岳にヤナギランを見に行く予定が雨のために中止たなっていたが、もともと開花時期を間違えていたらしい。頃会いを見計らって帰ることとする。途中、西山沢の廃居にコウモリを探して潜り込む。私が井川に住んでいた頃にすでに廃居だったような気がする。二軒建てだが一階部分が既に沈んでしまい、歩くたびに床が落ちる。当然、二階には上がれない。所々の部屋にコウモリの古い糞が溜まっているが、姿は見えない。多分、短期間に利用するだけなのだろう。あまりに床が落ちるので、奥の部屋に入るのはTAに任せることにした。しばらくして「いたー」の声。ウサギコウモリ1頭採集。しかし、1頭のみ。ここで、次の大沢渡あたりにある神社を探しに行くことにする。

10時55分、井川駅までくるとミニ列車が止まっている。「私の記憶が確かならば」次の列車は11時25分発のはずである。早く終われば、その列車にTAが乗ってみたいと言う。ここで温泉をあきらめた三宅さんらに追いつかれる。皆で神社を探すも見つからない。富士見峠を下ってきて、大きく道が膨らみ、井川村が見えるようになった道下の湖岸にあるという。三宅さんが見に行くがわからないらしい。OMさんが往復5分だけ探してくることにになり、三宅さんと交代して降りて行く。しかし、彼も戻ってこないで、仕方なく皆で降りて行く。結局は見つからず。そこで、今回の調査はここで終了ということになり、二人は静岡へ、我々は本川根経由で帰ることにして、改めてここで二人と分かれる。

井川駅まで慌てて戻ったものの（11時20分）、記憶が違っていました。10時55分発が正しく、11時25分は到着時刻でした。次の列車は12時25分である。待つには長いので閑蔵林道を千頭に向かう

ことにした。こちらへ来てから風呂に入っていないので、接阻峡温泉に浸かって、腹ごしらえと思ったら、予約しないと昼飯は不可だということで、入浴だけ。湯は肌にすべすべするこのあたり特有の風呂で、時々外に出て寝転がっていた。昼飯は駅近くの食堂へ。ここでビールが飲めれば最高なのだが、ここでも蕎麦を食べただけ。今回の南アルプス調査では、「ふるさと」の蕎麦以来のまともな料理である。

13時にミニ列車に乗るTAを長島ダム駅まで送り、食堂へ戻ってコーヒーを楽しむ。列車では千頭まで1時間以上だが、車なら15分もかからない。野帳の整理を始めるが、ここで突然いたづら心が沸いてきた。

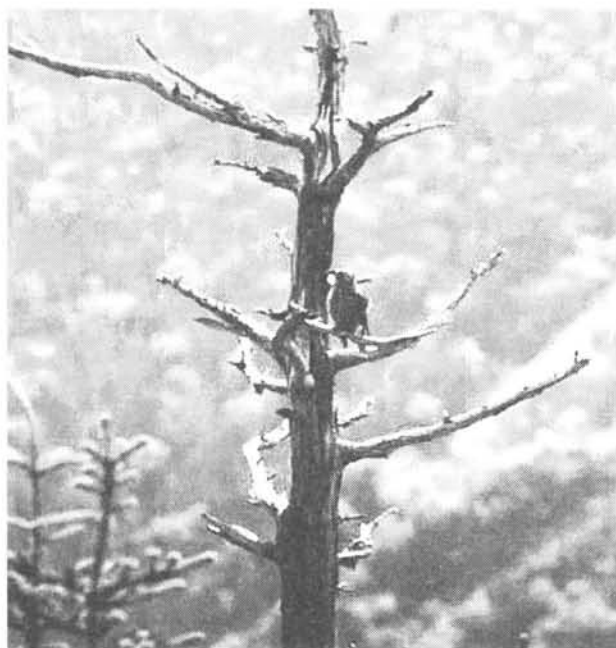
奥泉駅を過ぎて八木部落への手前は道路が鉄道と並走しているので、左側の座席に座っていれば顔を合わせるの、驚かせることができる。列車の右側は山側になるので、混雑していなければ、景色の見える左側に座るはずである。右にいれば次の場所を考えれば良い。14時10分にミニ列車が来た。最後尾の箱、予想通り左側の席にいたものの、残念ながら眠っていた。左座席だったから、次は池ノ谷だ。池ノ谷キャンプ場方面に向かい、列車をまたぐ跨線橋の上で待ち、列車が見えたら下って列車と並走するという計画である。眠っていたのでは面白くない、起きていてくれ。

列車が来た。今度は起きて、驚いた顔をしていた。大成功。次は、千頭直前の工事事務所脇の跨線橋の上で降りて待つ。ここでも成功。

千頭駅で上気した顔で降りてきた。いたずらは大成功。次は、先回りして同じ列車に乗り込んで前の座席に座ってやるというのを考えている。

ここから先は自宅までのんびりとしたドライブが続く、はずだった。ところが、磐田バイパス入り口で事故渋滞の表示があったのに、そのまま進んでしまえらい目があったが、なんとか帰ってきた。

これで今回の調査行は終了です。この調査も含めた成果は静岡県版レッドデータブックとしてまとめられました。なお、本文にでてきた地名の一部は地図から省略させていただきました。興味のある方はご連絡下さい。



ホシガラス：わかりにくいのですがちゃんと「ほし」
がありました



平成18年度自然環境教育センター事業報告

センターの教育研究活動

1. 奈良実習園における教材用各種作物の栽培（ソバ、マメなど）
2. 奈良実習園で育てたタマネギの苗とハボタンを地元民などに販売
3. 奈良実習園の花木園、教材用果樹園、ガラス温室、花壇と池の管理
4. 近畿地区教員養成大学農場等協議会参加（京都教育大学、12月8日）
5. センター紀要第8号発行（3月発刊）
6. 自然と教育第17号発行（3月発刊）
7. センター主催の公開講座など

「米作り体験教室」（奈良実習園、小学生・親40名、大学等地域開放特別事業）

第1回（6月10日午前、田植え）、第2回（10月7日午前、稲刈り）、第3回（12月9日午前、もちつき）

「夏の森を楽しもう」（奥吉野実習林にて、親子8組20名）7月21日～23日

第一回自然教室「チーズ作り」6月24日、25日、7月16日（12名参加）

第二回自然教室「チーズ作り」9月30、10月1、21日（8名参加）

第三回自然教室「味噌づくり」1月13日、3月13日（6名参加）

平成18年度 奈良実習園利用状況

	団 体 名	期 間	日数	参 加 者		利 用 目 的	
				参加者総数	教職員等		
公 開 講 座 等	公開講座「米作り」体験教室	6/10	1	40	6	ガイダンス・田植	
	〃	10/7	1	40	6	稲刈り	
	〃	12/9	1	40	6	餅つき	
	第1回自然教室「チーズ作り」	6/24	1	12	2	理論と製造	
	〃	6/25	1	12	2	理論と製造	
	〃	7/16	1	8	2	官能検査・まとめ	
	第2回自然教室「チーズ作り」	9/30	1	8	2	理論と製造	
	〃	10/1	1	8	2	理論と製造	
	〃	10/21	1	8	2	官能検査・まとめ	
授 業 ・ 実 習	「幼児と環境」	前後期	4	124	松村他	ジャガイモ・サツマイモの栽培活動	
	「地域環境演習」高齢者理解	前後期	18	56	川上他	サツマイモの栽培活動ほか	
	「生活科教育演習」	前期	4	8	岩本	梅の実の採取および加工	
	「生活科教育特講」	後期	6	12	岩本	栽培を用いた生活科の教育実践	
	「総合演習」	前期	14	210	森本・菊地	各種農作物の栽培と収穫	
	「身近な自然学」	前期	3	60	前田	動物の観察・採集	
	「栽培実習」	前期	15	195	梁川	野菜の栽培、生育観察他	
	「栽培原論」	前期	15	30	小林	野菜、稲の栽培、土壌実験他	
	「環境教育」	後期	13	156	岩本	ハ・タ・ギナン・ドングリ・アロエの栽培・バター・御糶缸	
学 生 他	「生物学実験」	後期	2	25	松井	植物観察	
	卒論研究（社会科教育研究室）	4～11月	15	1	岩本	アロエ栽培など	
	卒論研究（理科教育研究室）	5～10月	30	50	松村	ソバの栽培、ソバうち	
	ボランティアサークル なかよしひろば	春～秋	3	8	3	サツマイモの栽培活動	
	地域環境専修 改原	通年	15	30		無農薬有機栽培の実践および生ゴミ堆肥作り	
附 属 校 園	学生サークル キラキラ座	8～11月	10	90		映画撮影	
	奈良教育大学附属幼稚園	4/11	1	60	4	よもぎつみ	
	〃	6/13	1	126	10	じゃがいもほり	
	〃	10/24	1	143	16	さつまいもほり	
	奈良教育大学附属小学校	5、6、7、10月	4	424	3	米作り体験	
他 の 校 園	〃	5、10月	2	230	3	さつまいもの栽培活動	
	奈良カトリック幼稚園	6/8	1	44	4	じゃがいもほり	
	いさがわ幼稚園	10/13	1	85	13	さつまいもほり	
	極楽坊保育園	10/19	1	230	21	さつまいもほり	
	愛の園保育園	10/19	1	43	4	さつまいもほり	
	奈良市立東市幼稚園	10/23	1	29	3	さつまいもほり	
	(財)奈良YMCA	10/26	1	16	4	さつまいもほり	
	(財)奈良YMCA	10/27	1	16	4	さつまいもほり	
	親愛幼稚園	10/27	1	133	22	さつまいもほり	
	奈良育英幼稚園	10/30	1	53	10	さつまいもほり	
	そ の 他 の 団 体	NPO法人「奈良NPOセンター」	4～12月	5	75		食農プロジェクト「もうひとつの学び舎」 野菜の栽培
		社会福祉法人なのは倶楽部	春～秋	3	15	3	サツマイモの栽培活動
有機栽培の会		4～翌2月	20	40		家庭生ゴミを利用し、作物栽培	
その他	盆栽貸与	3月		1回		附属小学校卒業式	

平成18年度 奥吉野実習林 宿泊施設等利用状況

	団 体 名	利用期間	日 数	参加人数	利 用 目 的
公開講座	自然環境教育センター	7/22~24	3	27	公開講座(夏の森を親子で楽しもう)
授 業 ・ 実 習	「林間実習」	7/17~21	5	21	松井他
	「生活」	8/16~19	4	41	センター鳥居他
	「野外生活」	10/8~10	3	11	センター鳥居
ゼ ミ 等	植物生態学研究室(松井)	1/26~28	3	10	卒業論文本発表準備ゼミ
	自然誌(石田)	11/26~27	2	7	卒業論文における学年ゼミ
	近代文学読書会(日高)	8/30~9/1	3	14	研究会の合宿
	障害児教育研究室(越野)	9/8~10	3	14	卒業論文の検討及び合宿
学 内 そ の 他	大学祭実行委員会	8/25~27	3	23	親睦・研修のため
	秘書・企画課(井岡)	12/9~10	2	2	宿泊
	秘書・企画課(井岡)	2/11~12	2	2	宿泊
附属校園	附属中学校裏山クラブ(竹村)	8/2~3	2	2	下見
他の校園	日本大学生物資源科学部動物資源科学科野生動物学研究室	9/18~21	4	3	紀伊半島内陸部における地表棲小型哺乳類相の解明
そ の 他 の 団 体	大和郡山市立自然の家 自然観察友の会 OB 会	4/29~30	2	13	春の大塔の自然に親しむ
	橋本市子供会	4/29~30	2	10	自然観察
	橋本市子供会	5/3~4	2	10	自然観察
	ボーイスカウト奈良第18団	6/3~4	2	5	キャンプ下見
	ボーイスカウト奈良第18団	7/1~2	2	7	キャンプ
	ボーイスカウト奈良第7団	7/28~30	3	47	キャンプ
	ボーイスカウト奈良第18団	8/4~6	3	70	夏季キャンプ
	(財)全国学校農場協会・ 全国高等学校農場協会	8/8~9	2	36	農業実験実習講習会
	橋本市子供会	8/14~15	2	10	自然観察
	春日苑子供会	8/19~20	2	17	夏の大塔の自然に親しむ
	橿原市昆虫館友の会	12/2~3	2	15	森林再生事業についての勉強会
	そ の 他	ハイカー	4~12月	17	87
	合 計		49	334	

清水峰登山者はハイカーとしてまとめた

平成19年度自然環境教育センター事業報告

センターの教育研究活動

1. 奈良実習園における教材用各種作物の栽培（ソバ、マメなど）
2. 奈良実習園で育てたタマネギの苗とハボタンを地元民などに販売
3. 奈良実習園の花木園、教材用果樹園、ガラス温室、花壇と池の管理
（附属小学校における入学式、卒業式時への松盆栽の貸し出しも）
4. 近畿地区教員養成大学農場等協議会参加（神戸大学、11月9日）
5. センター主催の公開講座など
 - 「米作り体験教室」（奈良実習園、小学生・親25組30名）
第1回（6月9日午前、田植え）、第2回（10月6日午前、稲刈り）、第3回（12月15日午前、もちつき）
 - 「夏の森を楽しもう」（奥吉野実習林にて、合計31名）7月27～29日
公開講座「チーズ作り」6月30日、7月1日、2日、21日（30名参加）
自然教室「チーズ作り」9月29日、30日、10月20日（10名参加）
 - 「教師のための自然環境教育・理科教育講座」哺乳類の体の特徴を学び、教材（骨格標本）を作る、3月22日（附属小学校にて25名参加）

平成19年度 奈良実習園利用状況

	団 体 名	期 間	日 数	参 加 者		利 用 目 的
				参加者総数	教職員等	
公 開 講 座 等	公開講座「米作り」体験教室	6/9	1	30	6	ガイダンス・田植
	〃	10/6	1	30	6	稲刈り
	〃	12/15	1	30	6	餅つき
	公開講座「チーズ作り」	6/30	2	30	2	理論と製造
	〃	7/1	2	30	2	理論と製造
	〃	7/2	2	30	2	見学・予備日
	〃	7/21	2	30	2	官能検査・まとめ 試食
	自然教室「チーズ作り」	9/29	1	10	2	理論と製造
	〃	9/30	1	10	2	理論と製造
〃	10/20	1	10	2	官能検査・試食	
授 業 ・ 実 習	「幼児と環境」	前後期	4	132	松村他	ジャガイモ・サツマイモの栽培活動
	「栽培実習」	前 期	15	30	梁 川	野菜の栽培、生育観察他
	「環境教育」	春～冬	14	84	岩 本	ハハキギナン、トシグサ、ハクサイ、アロエの栽培、加工
	「生活科教育演習」	前 期	7	42	岩 本	ダイズの栽培、収穫、加工、梅の採取と加工
	「生活科教育特講」	後 期	7	42	岩 本	栽培を用いた生活科の教育実践
	「総合演習」飛び出せ探検隊	前後期	14	350	森本・菊地	各種農作物の栽培と収穫
	「身近な自然学」	前 期	3	60	前 田	動物の観察・採集
	「地域環境演習」総合演習	前後期	18	56	川上他	サツマイモの栽培活動ほか
	総合教育基礎ゼミナール	後 期	1	9	松 井	雑草観察
学 生 他	卒論研究	春～秋	8	2	岩 本	サツマイモを使った教材開発研究
	卒論研究	通 年	8	8	谷 口	生活科における綿の栽培の教材化
	卒論研究	通 年	30	50	松 村	ソバの栽培とソバうち
	地域環境専修学生	通 年	20	2		無農薬有機栽培の実践と生ゴミ堆肥作り
	物理学教室	通 年	25	40	久 保	栽培実習
	ボランティアサークル なかよしひろば	春～秋	2	8	3	サツマイモの栽培活動
附 属 校 園	附属幼稚園	4/10	1	50		よもぎつみ
	〃	6/12	1	115	8	じゃがいもほり
	〃	10/23	1	140	12	さつまいもほり
	附属小学校	5,6,7,10月	4	400	4	米作り体験
〃	5,10月	2	200	4	さつまいもの栽培活動	
他 の 校 園	奈良カトリック幼稚園	6/7	1	45	4	じゃがいもほり
	いさがわ幼稚園	10/12	1	39	8	さつまいもほり
	愛の園保育園	10/17	1	41	4	さつまいもほり
	愛染幼稚園	10/24	1	26	8	さつまいもほり
	奈良 YMCA 幼稚園	10/25	1	30	9	さつまいもほり
	奈良育英幼稚園	10/29	1	48	9	さつまいもほり
	親愛幼稚園	10/30	1	133	10	さつまいもほり
	奈良 YMCA 幼稚園	11/2	1	10	3	さつまいもほり
	極楽坊保育園	11/14	1	221	21	さつまいもほり
	奈良市立東市幼稚園	11/15	1	29	4	さつまいもほり
	特別支援センター事業	11/10	1	27	10	さつまいもほり
	その他の団体 NPO法人「奈良ネイチャーネット」	秋～	2	4	岩本他	菜種の栽培など

平成19年度 奥吉野実習林 宿泊施設等利用状況

	団 体 名	利用期間	日 数	参加人数	利 用 目 的
公開講座	自然環境教育センター	7/27~29	3	31	公開講座(夏の森を親子で楽しもう)
授 業 実 習	「林間実習」	7/17~21	5	19	松井他
	「生活」	8/16~19	4	41	鳥居他
	「野外生活」	10/8~10	3	13	鳥居
	自然環境教育センター	9/3~9	7	2	卒業論文のデータ整理
ゼ ミ 等	自然環境教育センター	9/10~15	6	1	卒業論文のデータ整理
	数学教育講座	8/4~6	3	14	代数学のセミナー(修論中間発表)
	障害児教育研究室	9/16~18	3	17	卒業論文の検討及び合宿
	地学平賀研究室	12/15~16	2	7	天体観測
	音楽科	9/3~4	2	8	野外活動
	学 内 そ の 他	秘書・企画課	4/29~30	2	2
教育課程開発室・入試室		7/7~8	2	20	地域推薦入試合格者の親睦と自然観察
入試課		11/10~11	2	2	宿泊
大学祭実行委員会		8/24~26	3	29	親睦・研修のため
近代文学読書会		8/26~28	3	13	研究会の合宿
劇団キラキラ座		9/11~14	4	6	夏季合宿
附属校園		附属中学校裏山クラブ	8/20~21	2	35
その他の校園	奈良県立青翔高等学校	8/7~8	2	17	林間実習
その他の 団 体	シニア自然大学 木下	4/15	1	4	登山(5月研修会の下見)
	シニア自然大学	5/19~20	2	44	NPO法人シニア自然大学の研修会
	橋本市子供会	8/12~13	2	10	自然観察
そ の 他	ハイカー	4~12月	28	112	登山
合 計			53	294	

清水峰登山者はハイカーとしてまとめた

自然環境教育センター協力研究員制度について

奈良教育大学附属自然環境教育センターには「協力研究員」という制度があります。正直なところ、気軽にセンター行事に参加できるというくらいしかメリットがあるわけではありませんが、自然環境に興味があり仲間がほしい、あるいは活動拠点がほしいなどとお考えの方はご参加下さい。現在は40名の方が登録されています。詳細は前田（0742-27-9207）か鳥居（27-9142）へ問い合わせ下さい。協力員制度の内容は以下のとおりです。

奈良教育大学教育学部附属自然環境教育センター協力研究員の委嘱についての申し合わせ

（平成13年6月21日）

目 的

自然環境教育センター専任教官、兼務教官以外の自然環境教育を志向する本学教官、および学外者をセンター協力研究員として、これらの方々の多様な経験、知恵を取り組むことによって、教育研究活動をより一層活発にするとともに、自然環境教育のより広い推進を図ることを目的とする。

対象者：センターの目的を理解し、自然環境教育を推進する以下の者。

1. 本学教官（附属校園教官、非常勤講師を含む）
2. 幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学等の教員
3. 自然環境関連博物館などの職員
4. その他センター長が認めた者

委 嘱：運営委員会の議を経てセンター長が行う。

任 期：2年とし、再任を妨げない。

特 典

1. センターが発行した出版物を受け取り、様々な情報を広く得ることができる
2. 奥吉野実習林や奈良実習園など関連施設、センター施設を利用できる。
3. センター主催の研究発表会に参加できる。
4. センター発行の紀要に論文を投稿できる。
5. センターにおける研究プロジェクトに参加できる。

センター運営規程との整合性

（センターの利用の資格）

第12条 センターを利用することができる者は、次の各号に掲げる者とする。

- 五 その他センター長が適当と認めた者（学外者はここに位置づける）



奈良教育大学付属小学校 井上龍一氏撮影

交通事故死したキツネ：こんな可哀相な殞死体を集めてきて、解剖実習に使っている。残念ながら多くの場合、頭骨はつぶれていて完全な骨格標本にはならないが、破片を組み立てるのも逆に良い効果をもたらしている。死体があるということは、そこにキツネが棲息していることのできる確かな証拠になる。胃内容物は食性分析に、筋肉片は遺伝子解析に使われる。毛の間や体の中からは多くの寄生虫が採集される。最近では消化管や肺にシリコンを入れて、内部構造を観察することにも使われている。人間生活のための道路で死んだのだから、少しでも彼らの生活史や生態を明らかにすることで弔いになればと思う。

編集後記

今回の表紙はいつもの写真に代わりに絵にしました。夏に五條市の奥吉野実習林で実施される教科「生活」の集中講義の際のスケッチです。平成18年度まで実地指導講師をお引き受けいただいていた山口礼朗さんが、講義の合間に書きためたもので、地元の方の指導のもとに藁草履作りをしているところです。

安藤さんは奈良大の大学院生の頃からセンターのゼミに参加していました。イノシシ研究を通して奈良大から見た奈良教を執筆してほしかったのですが、敢えてそのことは伝えませんでした。頂いた原稿を見て、内容と実名であることに驚きました。彼はこの春から北海道で仕事していますが、奈良教へ強烈なメッセージを残してくれたようです。元気でご活躍下さい。北の便りをお待ちします。

前回に引き続き解剖を取り上げました。今、教育現場から解剖は遠ざかっているとされています。実物に手を触れる経験は解剖では特に重要でしょう。その現場で解剖に苦労された田村さんの実体験は示唆に富むものです。

今回はレッドデータブック作成のための南アルプスにおける哺乳類調査行を取り上げました。緊張する調査でのほっとする場面も多くあることを読みとっていただければと思います。

教育実習で、ある協力高校を訪ねました。その高校の理科系の先生によると教員養成系大学の学生は実験系の授業に強いとのこと。高校の粗末な実験施設でもそれなりに工夫しているとのこと。それは教材研究の成果ではないかと思われ。私の周りにも授業以外にリタイアした先生に、拾ってきた壊れたラジカセで物理の実験を教わっている学生もおりましたし、私も土曜日に非常勤講師をしている卒業生の解剖実習につきあったことがあります。そんなことの積み重ねの成果でしょうか。センターでは解剖の機会をできるだけ提供できるようにと考えています。